

「女性の活躍促進」のために 学長からのメッセージ



微音塾開講式

女性の社会的活躍への期待が高まっている。

この状況に対して、国立の女子大学であるお茶の水女子大学は、グローバルな視点をもってリーダーシップを發揮できる女性の育成のために様々な取り組みを行っている。その一端をご紹介します。

『日本再興戦略』改訂2014（6月24日閣議決定）では、「2020年に指導的地位に占める女性の割合30%」という数値目標が設定された。また、先月（10月10日）には、「すべての女性が輝く政策パッケージ」が公表され、関連する法案も整備されることになっている。

女性の社会的活躍が課題とされるに至った背景には、世界的な経済状況に加えて、2012年にIMF年次総会が東京で開催された際に、専務理事のラガルド氏が、女性の継続就業が可能な環境の整備が日本経済を改善する、と発言したことがある。さらには、世界経済フォーラムが毎年発表しているジェンダー・ギャップ指数（GGI）の国際順位が年々下降し、2014年には日本の順位が142か国中104位となったことも影響している。GGIは、経済活動、教育、保健、政治の四分野に関する男女格差の状況を数値化したもので、日本は、このうち教育、健康に関するスコアは高いものの、経済活動、政治への関与の点で著しく低い。これとは別に、国連開発計画（UNDP）による「人間開発報告書2014」の人間開発指数（HDI）では、日本の順位は187か国中17位である。人間開発指数は、保健、教育、所得の三側面によるその国の平均達成度から順位付けされたものであり、この順位と比較しても、女性の経済活動や政治への参画が重要な意味をもっていることがわかる。

また、女性の活躍が経済を活性化させ生産性を向上させることや、女性が30%以上を占めると組織が変わるといいうことも経験的に示されてもいる。

そこで、国際的な状況からも、経済の活性化の点からも、女性の社会的活躍が期待されるのである。

この状況に対して国立の女子大学である本学がなすべきことは、指導的立場で活躍する女性の育成である。とはいえ、本学は創設以来この役割を担ってきている。

お茶の水女子大学は、その前身である東京女子師範学校が1875年に設置され、来年創立140年を迎える。この間、本学で学んだ多くの女性が教師として教育界を支え、女性研究者として実績を積み、貴重な足跡を残している。教育組織を創立させた卒業生や先駆的な女性研究者が多く、中でも、卒業生の会である桜蔭会が、関東大震災翌年に桜蔭学園を開設させたことはその象徴でもあり、研究の分野では、女性で初めての理学博士や農学博士も本学の出身者である。

そして最近では、本学の卒業生の活躍分野は教育界、研究界に限らず行政機関や産業界、メディアなどにも拡大している。

先日男女共同参画推進連携会議が開催され、そこに議員として参加した時のことである。そこでは、企業、教育機関、報道機関、国際機関や自治体の男女共同参画のリーダー18名が有識者として名を連ね、そのうち女性12名の中の4名が、議長、副議長を含めてお茶大の卒業生であった。また、これとは別に、女性4名のうち3名が本学の卒業生という審議会もあった。学外の会議などで出会う女性の委員が本学出身者であることは多く、しかも多様な職種の人々であり、お茶大生の活躍の幅は確実に広がっている。

社会的に活躍する卒業生が多く、しかも活躍の場が多岐に亘っていることを考えると、この社会的状況も考慮した教育の改革が必要なことは明らかであり、その改革を本学は不断に実行してきた。



ジャパンダイバーシティネットワークキックオフシンポジウム

新入生を対象に本学の教育や研究の特色などを講じる「お茶の水女子大学論」の学生のリアクションペーパーには、「先を見た教育プログラムを導入していて、学生の目的意識が高く、誇りに思う」、「小さな大学でも大きく学べることがわかった」などと書かれたものがある。

法人化後の10年、本学ではとくにグローバル女性リーダーの育成を使命として、新たな教育体制を構築してきた。

まず、「21世紀型文理融合リベラルアーツ」教育と、「複数プログラム選択履修制度」による専門教育がある。これは、「深い」教養と「広い」専門性を身に付けてリーダーシップを発揮できる女性の育成を意図したものであり、これに加えて、女性リーダーの育成を主眼としたキャリアデザインプログラムがある。このプログラムは、本学の学生が主体的で自立的であることによっていっそう有効に機能しているといえる。またリーダー育成という点では、モデルとなる多くの卒業生の存在は大きい。

グローバル化に対応した取り組みとしては、語学力を強化する教育プログラムの新設と環境の整備、留学機会を拡大するための四学期制の導入、留学のための経済支援基金の新設、がある。中でも、国立大学として最初のケースとなった四学期制は今年度から開始したが、留学促進のためのこのような教育環境の整備は、学生の約7割が留学を希望しているという本学の状況からして極めて意義あるものと考えている。

さらに、大学院博士課程では、理系分野で産業界との連

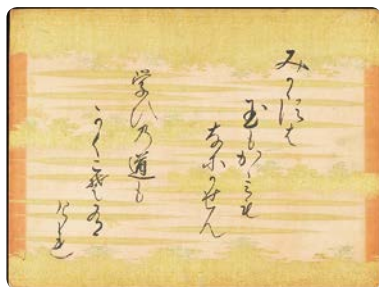
携を強化するために「博士課程教育リーディングプログラム」を昨年度開始した。これは、理工系の博士人材を育成し、教育研究機関に限定することなく女性の活躍の場を拡大しようという試みである。

研究機関としては、「女性の活躍」そのことを研究対象としてそれを効果的に促進させることも必要である。つまり、グローバルな視点をもってリーダーシップを発揮できる女性を育てることに加えて、その手法や効果、社会的文化的意義についての研究も重要である。そこで、来年度新たに「グローバル女性リーダー育成研究機構」を本学に開設する。この研究機構は、国際的な女性リーダーシップ研究の拠点となって真に豊かな社会の構築に貢献することを目指す。女性の活躍は、単に「指導的地位に占める女性の割合30%」という数値目標の達成だけではなく、新しい価値や考え方を社会に提供するという点でも有意義であり、そのための教育研究を担うことも本学の重要な役割と考えるからである。

お茶の水女子大学の教育と研究の基盤をさらに堅固なものとし、本学で学んだ学生が、高度な知識を身につけ、事に当たって適切に判断できる能力と寛容さを備えて、広く社会で活躍し、豊かな未来の創造に貢献することを心から期待しています。

2014年10月

国立大学法人 お茶の水女子大学長 羽入 佐和子



校歌「みがかずば」

「女性の活躍促進」のために
学長からのメッセージ